

重要文化財に2件指定

今年3月、山田寺跡(桜井市山田)出土遺物および平城宮跡内裏北外郭官衙出土の木簡群が、重要文化財に指定されました。

山田寺出土の考古遺物

山田寺の発掘調査は1976～96年に11次にわたって断続的におこなわれました。とりわけ注目を集めたのは、土砂崩れで倒壊した回廊の建築部材が、おびただしい屋根瓦の下敷きになりながらも、組み合わさったまま出てきたことでした。

しかもこれらは、現存する世界最古の木造建築である法隆寺金堂よりも半世紀ほど古い7世紀中頃のものでした。法隆寺の建築と比較すると、柱のエンタシスなど共通する部分もありますが、扉の軸の上部を支えるのに、^{なげし}長押を使わず^{わらざ}藁座という部材を用いるなど、現存する古代建築ではあまり一般的でない技法も見られます。飛鳥時代の建築の多様性を証明する、あらたな古代建築の発見だったのです。

その後、保存処理を経て、飛鳥資料館に展示されている回廊3間分の部材92点が、このたび重文の指定を受けました。出土建築部材の指定は全国初であり、名実ともに文化財の仲間入りです。

建築部材とともに出土したおびただしい数の瓦も指定を受けました。出土数は軒瓦だけで5千点以上、丸・平瓦などもふくめると1万点は下りませんが、今回は、そのうちのごく一部、563点が対象です。7世紀中頃の創建期の瓦をはじめ、1187年に興福寺の僧兵が薬師三尊を強奪した後の再興期の巴文軒丸瓦まで、山田寺の屋根を飾った瓦のオールスターが勢揃いしています。

指定された瓦は、軒先を飾る軒丸・軒平瓦だけで



指定を受けた回廊部材の出土状況(1984年)

なく、丸・平瓦、屋根を支える垂木の先端にとりつける垂木先瓦、^{はふ}破風の先端に^{けらば}葺く^{しび}鸕羽瓦、大棟の両端を飾る^{まが}鴟尾、鬼瓦、文字・戯画瓦など多岐にわたります。なかでも垂木先瓦には蓮華紋の瓦当に朱・白・黒の彩色が施されているものがあり、軒先を華麗に飾っていたことがうかがい知れる貴重な資料です。

『上宮聖徳法王帝説』裏書^①『日本書紀』によると、山田寺の造営は643年の金堂建立を嚆矢としますが、649年に発願者である蘇我倉山田石川麻呂はじめ一族が自害したために一度中断します。その後、天武朝に再開されて塔は676年に、講堂は685年に建立され、ようやく伽藍が完成をみます。瓦の製作技法を細かく分析して変遷を追うと、この史実におおむね整合することがわかります。さらに、塔に葺く瓦を造営中断以前に準備していたこと、奈良時代に金堂や塔の全面的な修理をおこなったことなどが明らかになりました。

このように、瓦は建築部材の一部ですが、瓦当文様や製作技法を研究することで建物の造営過程や氏族と寺のつながりなど様々なことがわかります。今回の重要文化財指定が、瓦に対する理解や重要性を一層深める契機になればと願っています。

そのほかは、礎石・壁土を含む建築部材88点、五尊仏1点、押出仏3点、磚仏39点、石燈籠の破片1基分、飾金具や釘などの金属製品137点、ガラス小玉3点、土器・土製品106点、建築部材を除く台脚などの木製品51点、砥石などの石製品14点、銭貨15点、木簡27点が指定されました。今秋には、飛鳥資料館にて重要文化財指定記念の特別展を開催する予定です。こちらもお楽しみに！

(都城発掘調査部 箱崎 和久・石田 由紀子)



金堂の軒瓦